



展覧会の準備に参画した調査委員会のメンバーたち



小豆島石丁場調査概報

小豆島石丁場調査委員会

編集 小豆島石丁場調査団
発行日 二〇二四年三月三十一日

No.3



2024.3.16 sat - 5.12 sun

令和6年春企画展 土木遺産展「石をよこぶ 瀬戸内の石の島から大阪へ」
大阪府立狭山池博物館 1階特別展示室

休館日：毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日）

開館時間：10:00 - 17:00（入館は16:30まで）

観覧料：無料

※博物館敷地内には車いす利用者・ゆずり合い区画の駐車場があります。

一般の車庫は約560m西にある狭山池の北郷駐車場をご利用ください。

主催：大阪府立狭山池博物館・大阪狭山市立歴史資料館協議会

共催：公益社団法人土木学会関西支部、小豆島石丁場調査委員会

後援：国土交通省近畿地方整備局、香川県教育委員会、土佐町、土佐町教育委員会、

小豆島町、小豆島町教育委員会、南海電気鉄道株式会社、京北高速鉄道株式会社



約4000年の土木遺産を顕現する
大阪府立狭山池博物館
Iiyama Pond Museum
〒594-8607 大阪府狭山市芝田2丁目
TEL: 072-272-1001 FAX: 072-272-1002
https://www.iiyama-pond-museum.or.jp/

案内チラシ

二〇一九年に日本遺産に指定された備讃諸島の一つ小豆島、石の島として今注目を浴びている。二一年に小豆島石丁場調査委員会が組織され、島の石丁場の調査が進められているが、今回「石をはこぶ」をテーマに大阪の府立狭山池博物館で企画展が開催される。これは土木構築物や建造物を造るに不可欠な素材である「石」を取り上げ、日本の土木技術を支えてきた瀬戸内の花崗岩と石切技術を再検証しようとするものである。大坂城石垣には小豆島の石が多数使用されてきた。「石の島、小豆島」の石が、どのように切り出され大阪へ運ばれたかを、様々な絵図・古文書や刻印・矢穴資料、映像などをもとに紹介する。

この展覧会は調査委員会が三年にわたって調査研究をすすめてきたその成果をもとに、共催として開催される。昨年度は「日本遺産の石の島、新たな発見と保存をめざして！」をテーマに小豆島石のシンポジウムを開催し、島内外の多くの人たちに広く取り組みを紹介した。今回の展覧会は石を受け入れた側からの観点で鑑賞し、「石の島」の魅力を感じてほしい。



旧土庄村庄屋笠井家墓地

を実施した。徳島文理大学生の協力を得て、位牌から史料に見られる当主の確認をする。その後、調査員により笠井家墓地の調査を実施する予定である。

六月には五人の調査員により、土庄町立中央図書館に所蔵されている古文書群から、土庄村関係文書を抽出し、石丁場・石材に関わる史料の検索を行った。村絵図・村明細帳などを検証したが、残念ながら土庄石丁場に関する記事は無く、わずかに豊島での石運上切出しを記述した記事を見るだけである。以前、徳島文理大学を中心とする小豆島町の古文書調査でも、石関係史料はほとんど検出されることはなく、島内では笠井家文書の重要性が再確認された。

今年度の調査は、前半期の文献調査から始まった。まず、四月二日に旧土庄村庄屋であつた笠井家の石関係史料の確認と、先祖の位牌の調査

七月二七日、調査員六人による瀬戸内海歴史民俗資料館の調査が実施された。事前に目録から抽出した絵図をメインにして、絵図上に石丁場の所在が示されていないかを目的に調べを進めた。まず、土庄村山林字限切絵図を調べたが、千軒・西瀧・東滝・小瀬奥という小字とともに蛇谷の小字の切絵図があつた。小瀬と隣接しており、現在調査中の場所と一致することが証明できた。だが石丁場の所在場所は示されていなかった。

足守文庫の写である延宝五年〜七年の小豆島地図の星ヶ城より岩谷等への中に、とちめんじとたいあじろが記載されている。これは絵図作成の下書きとみられるもので、畝筋と谷筋が記載され、両所の場所が示されてお

り、比定場所を明らかにすることができるとが貴重な資料といえる。夏の調査の参考にな



瀬戸内海歴史民俗資料館絵図調査

る資料で、調査への期待が高まつた。

夏の調査は小豆島町の福田地区の石丁場に重点を置いて実施した。今年度第一回目の現地調査は、



サップによる海上移動はスムーズ

九月九日から一日にかけて、福田地区海岸線の鯛網代ととちめんじの調査である。絵図に示された場所を確認しながら、ドローンとサップを活用しての調査であつた。参加者は調査員・協力者・学生補助員併せて一四名で、そこにはマスコミも参加した。

一日目は福田港から渡船で鯛網代石丁場へ。海岸線をドローンで空撮し、指示された場所へサップで赴く。十字に刻まれた矢穴のある巨石沖を重点的に調査するが、海中には期待するような石は見つからなかった。刻印巨石は山からの落石と考えられるので、後背山間部の調査の必要性が生じた。

二日目は文献に記載されているとちめんじの状況を確認する。海岸線や海中には残石は見ら



福田庵豊島石製石仏17C前半

陸上の石造物を調査している調査員は、福

れず、後背山にも遺構は残っていない。後背地は近代石丁場が拓かれ、現在も活動しているため、往時の丁場は破壊されていると考えられる。とちめんじから小島にかけての海岸線を調査、小さな矢穴石が少数見られた。また、小島周辺の海中に残石があるが、詳細は十分に確認できなかった。

午後から再度鯛網代へ移動し、以前発見した藤堂氏の刻印がある石を確認して、拓本採取を行った。また、十字矢穴の巨石の拓本採取と測量を行い記録した。その後、鯛網代より南方の踏査を行うが遺構を見ることは出来なかった。岩谷石丁場までは海際まで急峻な山が連なるため石丁場の開拓は困難であったろう。



拓本うまく採れたかな

刻印石は無かったが矢穴が大きな石を数個発見した。石丁場の拡大が明らかにされつつある。

田地区の寺社・墓地の悉皆調査を実施して、その後岩谷から橘地区まで足を伸ばした。地区ごとに石材が異なり、豊島石や播磨竜山石など他地区産石材が見られる。

一方、他の調査員により、昨夏の調査で発見した小瀬海岸の突堤のような構造物の周囲に、残石（矢穴石）がないかの確認調査を行った。シュノーケルにより、海岸線と平行して泳ぎ、視認できる石を探したが、矢穴を確認できる石は見つけられなかった。海水の透明度が悪く、海況も不良のため、十分な調査はできなかった。

最終日は、次回調査予定場所の状況確認に赴くが、天候不良のため断念、その後大坂城残石記念公園資料館の見学と今後の調査について打ち合わせを行った。

第二回目調査は、十一月二十九日調査員五人で、小瀬地区の以前発見した巨石の奥の谷筋を踏査した。

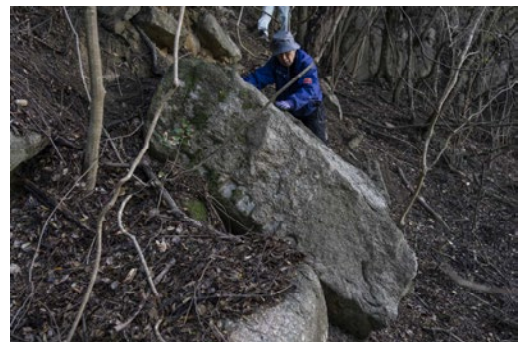


この石は大きさは？ 記録しておこう

翌日は森ヶ滝牛ヶ谷橋奥にある砂防ダムの上下流を踏査。砂防ダム上流にはコッパや小さな矢穴のあいた石が散在、火

真撮影を行い、今後の資料とする。

まずは国道より山側に入るが、近代遺構が残されていた。次いで鯛網代海岸を目指して国道から谷筋を下る。急斜面にいくつかの矢穴石を発見、海岸の巨石はここから落下したことが明らかになるとともに、この山中に石丁場が拓かれていたと確認する。GPSによる位置確認と写真撮影を行い、今後の資料とする。



急斜面に残る石

石造物調査員は笠井家墓地を調査し、墓石名を確認、今後位牌名と照合を行う予定。

三回目の調査は、一月二・三日に五人の調査員が福田地区で実施した。



GPSでの位置確認と写真撮影



砂防ダム下流の矢穴石

薬庫跡が随所に見られ、近代石丁場としての遺構が残る。ダム下流では、大きな矢穴の石を二個見つけた。うち一つは水流の影響で形が薄くなっているが、

調査を実施した。測量と並行して、大山津見神社の奥を踏査したが、矢穴のある石は確認できなかった。

今年度は調査の回数は少なかったが、当初の目標はほぼクリアした。来年度は、残された課題を克服して、報告書作成の準備にかかるよう努めたい。

調査雑感

小豆島の石丁場の原点は、大坂城石垣築造の石を供給する目的で拓かれたことに始まる。島で採石され大坂へ運ばれたが、四〇〇年を経て、両者の関係をテーマに、大阪の博物館で展覧会が開催される。現在の小豆島と大阪を石で結ぶ道が再び開かれたといえよう。展覧会は委員会共催として、メンバーが積極的に取り組んだ。島の石の文化を広く伝えたいとの思いがあり、ここには調査の成果が生かされている。なお、展覧会開催中に講演会・シンポジウムが開催されるが、三人の調査員が参加する。

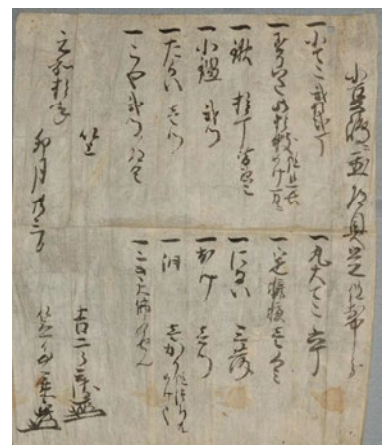
その後東谷石丁場近くの残石が集められた場所へ行き、それぞれの石を測量記録した。午後からは町指定石丁場(東谷丁場)の奥を踏査、従来知られていた石の場所よりも山中深く行くと矢穴がある石を数個発見、このことから石丁場は広範囲に及ぶことが明らかになった。



巨石のレーザースキャナー測量

三月一二・一三日、調査報告書準備の一環として、石丁場の測量を行った。福田地区では西谷石丁場にある多数の矢穴が並んだ巨石の三次元レーザースキャナー測量

展覧会には旧土庄村屋笠井家に伝わった史料が何点か展示されている。土庄村には肥後加藤家の石丁場があり、笠井家に残された史料で石丁場で使用された道具類の記録がある。笠井家がいかに石丁場や加藤家と関わりを持ったを示す伝承がある。西光寺裏に二基の祠があるが、石を運び出す際に亡くなった人を祀る



小豆島に置く道具覚(笠井家文書)

りを持っていた。また、千軒石丁場付近に所在する堀神社の場所は旧笠井家の土地といい、神社は堀を埋めた際に白蛇の霊を吊うために創建と伝える。祭礼にも笠井家が関わっていた。昔は水路が神社付近まで続き船繋ぎと呼ばれる石杭があり、船を係留出来たという。ここから石を搬出したと推測できる。加藤家の家紋は蛇目紋であり、白蛇は加藤家を示したものと考れば、改易になった加藤家の霊を祀るため神社を創建したとも想定できる。このように加藤家と笠井家の深い結び付きを想像することができる。

〈編集後記〉

膝を痛めながらも石を求めての山歩き。若者たちは休んでいるようと気遣ってくれながら、石を発見した時にその場にいなければがっかりする。だから山へ入るのだ。多くの人に支えられながら早三年が終えた。調査は後一年しかない。全精力を注いで頑張らなくてはと思う昨今だが……。(S記)